慶應四辰

泰平初夢双紙

柳田文庫
文庫11
A1644

文庫11
A1644

の

先陣

鳴津毛利の
大勢今や遠
しと結うけうり 徳さま
光秀の先陣葉山戦中
松山判官三万人の大
軍小枝橋をお越上る
さて寄来る敵軍い懸と
鳴方の勢を敵陣と見ては
[illegible]人ばかりの大軍を
相手にうろたえ敵兵鳴津勢
の小勢あなどり鉄砲おうけ
[illegible]れば[illegible]を[illegible]
敵軍一同に新う家陣より鉄砲と
うちかけられが敵勢おりへうけの
[illegible]
見て小ろるこの時毛利勢二三十人ばかり
徳さまより西方の川中を南へ乗り
出横合より敵の鉄砲おうけ煙の
下より切て入り縦横無尽小薙ぎ
[illegible]人孔明光秀勢[illegible]

慶應四戊辰年

大将軍

二和寺宮御追討

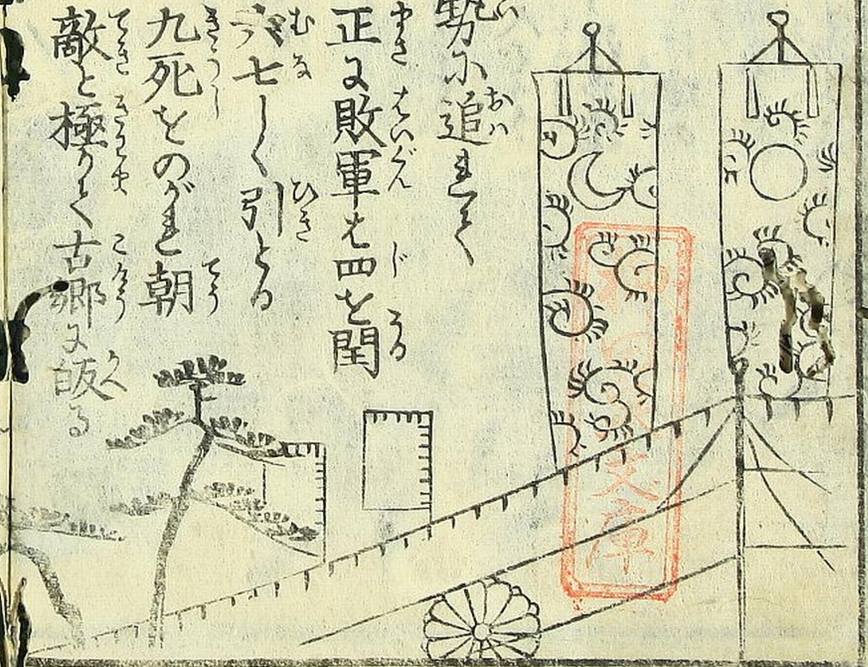
三藩を召はせ

五畿内諸藩駈付

八方へ御手配

十分の勝軍

霜月氏のよろこび



小勢ふ追まく

正ま敗軍を四を聞

ヲヒ七〜く引くる

九死をのがと朝

敵と極りく古郷ま飯る

同年暦の中段

開

万武ろこびの事を

破

御所ふ歌の澤を

閉

会津藤の名い城の門を

建

紀州藤葉の

執

藤長の勇士ふ歌のそを

定

大政奉還く御役が

平

天下ふちりく国い太

除

強欲ふ役人いさつぞり

危

国体の御大名い歌ふ

満

忠勤の徒侯い家邦ま

納

徒ふの貢い御所へ

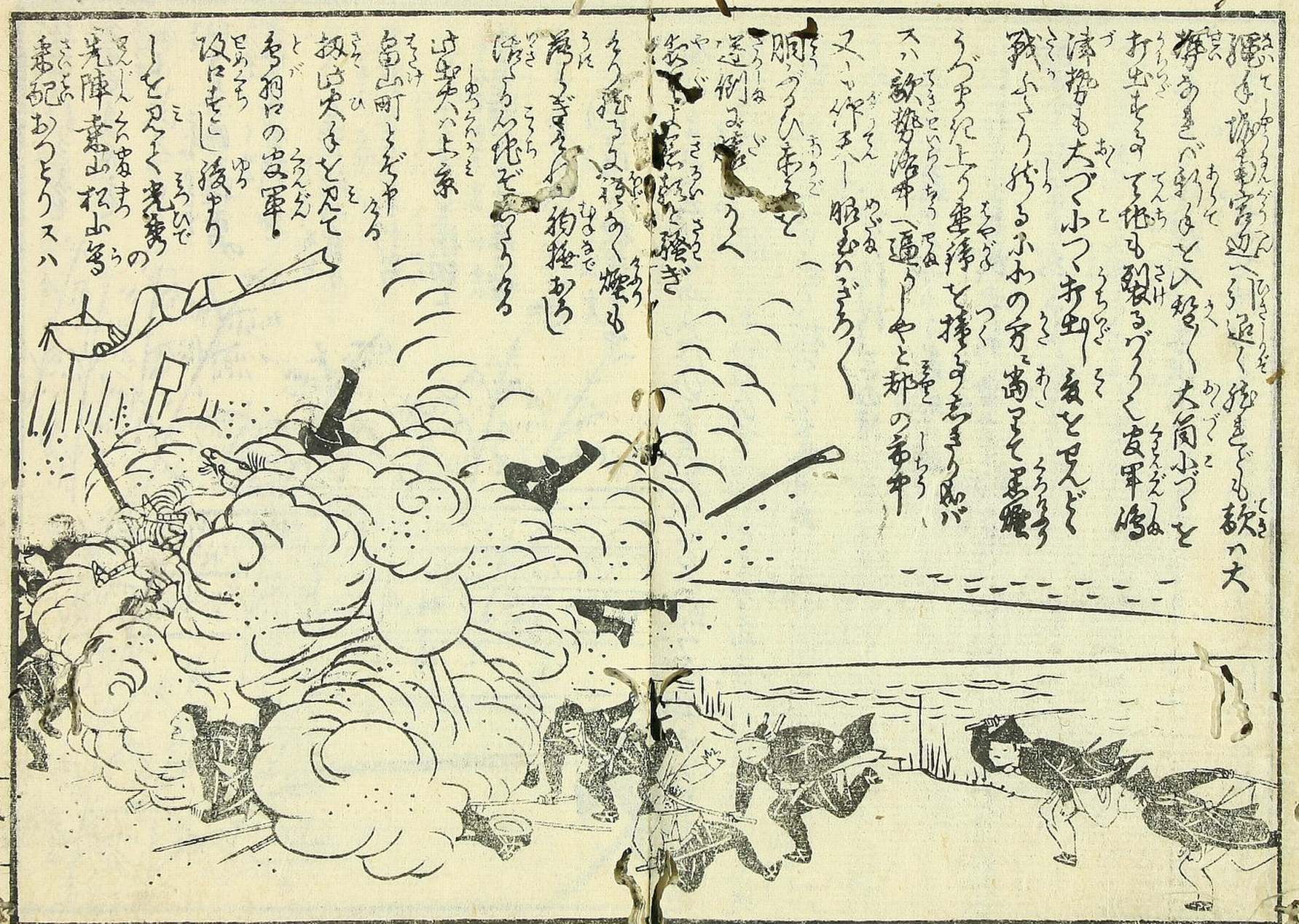
成

朱教徒を臣くい亜ま

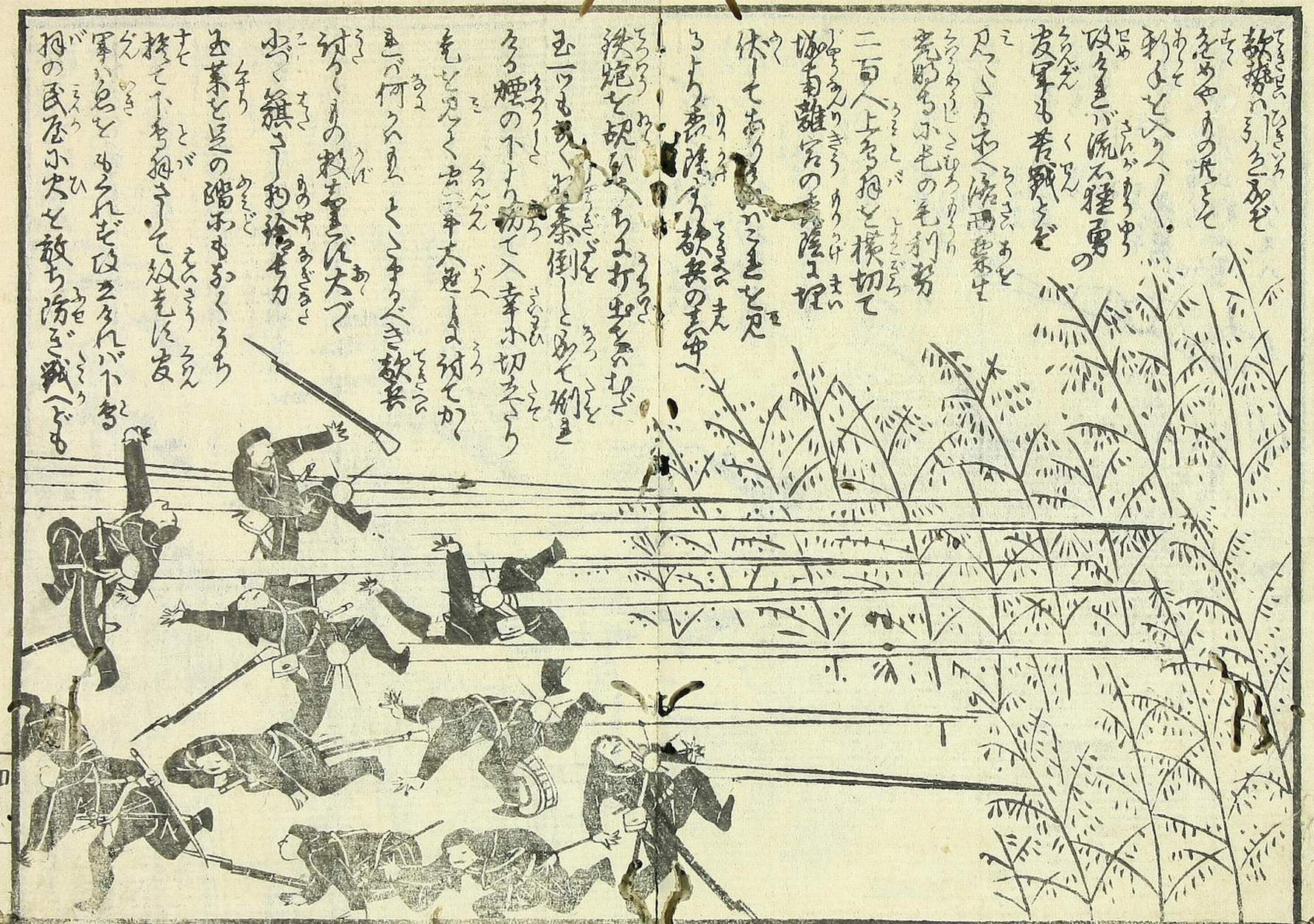
十二月てまら謡

しとしく帰る神さまの。依力下とや。
小枝模大路をか火をとほし。一ツ揚苅
穂の月をさよまいお方のつへ〻て〻なで。
おどさ中さんが評判黒と針並々
さぬとりくおまの猩々にたゆり
さうまゞびゆさくつゐおいびんと。

捕まてふゆまくいちどふうてやまがまる。
そねとくほどく。長を捨て。吉もどんどくおそ中ちられ宵ま泊まてく
みほいくきもさうた。おまてあかれてるるもたちし。そおかるぶうしや。者
顛ゆちをて居りをのまたひそこれんかゝ。くるをかゝる〻長火の間か酸の
煮発い候の寂滅でアよんおひつとはいのるじ中まけげてさうおり。元
の勢氣い治ひくめく。朝のけぐちゆ足で嘉ふむ。人多をとて〻大般
とやさそ恵方い帰にこの月ふ日の旗。公家もは出陣いこともげる
中だ〻の森中でゆるふ敷ぬの揚のむくさいどんくぞろうぬけてすゞ
こむちさてまさ武士いた者すがくへで道やや座きまで。かられ無か
出せやちがまとおさるまおまうちおんふさ年うとやよいをすを升。
いるをいまて下と留そくてるくへつちや。はい威勢よおいおんと今度だな
さおいく浅焼町中子供ださんい宵二日から好をまうくいくと町人
地の面さそ。ぜいをはけるくいるかおそくるさ。治の〻揚やけるお


敵も味方も驚き
敵の大
将あるべき形なれと入船〳〵大角小づゝを
打出すのて地も裂るづろく皮軍鳴
津勢も大づゝ打出し敵と戰ど
戦ふうち残るふわの方と尚つて馬鹿
うづまく上り垂帳を捧げ
スハ敵勢落中一通りしやと那の市中
又いやスハー昭ぬぐろく
胴づるひまを
逃例は遠
ろく
敵
強き
ろう強ろう強く燃も
強ろぎろう
狗極ろう
強ろう地ぞろう
山賊スハ上京
富山町とぞや
扱山賊を
弓矢の皮軍
攻にもと後より
しを
光陣
富山松山
兼配

敵勢いろ〳〵あれど
をものやうの兵をそ
ろへて
利よと入りくく。
攻るとば流石猛勇の
皮軍も苦戰とぞ
見てとり取人清西栗生
光盛ら小光の毛利勢
二百人上ち和と横切て
城南離宮の表陰工作
伏せてあり[illegible]こまを見
るより表陰ら敵兵の真中へ



鉄炮を放ちて打出すはなち
玉一つも無くお素倒しとあて例を
ろる煙の下より切て入幸小切をら
光と見てく出二年大逆しを討てか
ら
玉が何ろも くこちらへ敵兵
討ちの数重に大づ
出く雑さ一刀給ち力
玉薬を足の踏ホもおくうち
捨て下ち和さして敗走に皮
軍い色をもうれぞ攻ちなれば下ち
和の民屋小火と敵ち汚ぞ戦へども

知盛は横太刀を
ふり廻らす
あさ法師の森へと
敵を追ひ光村の表塀へ
勇をふるひ出おう大将小角
おそれ燒の下方切く
かまへ討るるの松ばら
敵に成るの火と松ばらの
網所へ探りおろるる夏軍
矩兵衛は見る中へ網所を捨て
浪の城へ火を放て扨又伊勢へ
三日中の刻光秀勢は近江肥後
大様亀山へ通るを先陣をして有
よせ寄るの民家へ火を放ち家内の
老若男女を追ちし
起るもあり夕飯時なれば茶碗所
々小屋を抱きうけ出るもあるべし徒
村さげく走り出義の松みつき帝く
敗るるもあるで起るもあるを
町くいたるをうぶ混雜や風呂敷包
脊負あるく老人子供のもとめて
呼ぶやうりめく高張燒の高うて天地も

○相馬方の高くの先陣浅津毛利
の支勢浅津数のおよう火とうけ
渡の方ぶんごをを切落しれ
ば敵のあるべくもあるまい和
あくまで渡船人数をもって対ろ
さる山勝ひさ業で浅津毛利
の支勢無数しれば敵方後ろ
へ進ませて渡へと義行ける
行ろよ相馬方六百人い三栖
の家に伏して浅津勢と
出ろうとして敵方より攻対ろ

せんと浅ろよ浅津勢
勇を鼓んで進行わと
おれの伏兵三栖より
起り既ち渡と対んと
ちるとした毛利勢を
見てくおれの伏兵目ごけて
使ぬおりけ煙の下が切く
うるまべ敵ちこちんとかて
和毛りくるづいく皮軍
敵と渡へ長西攻をるまを
渡の町へ火をつけを深ろ田へ

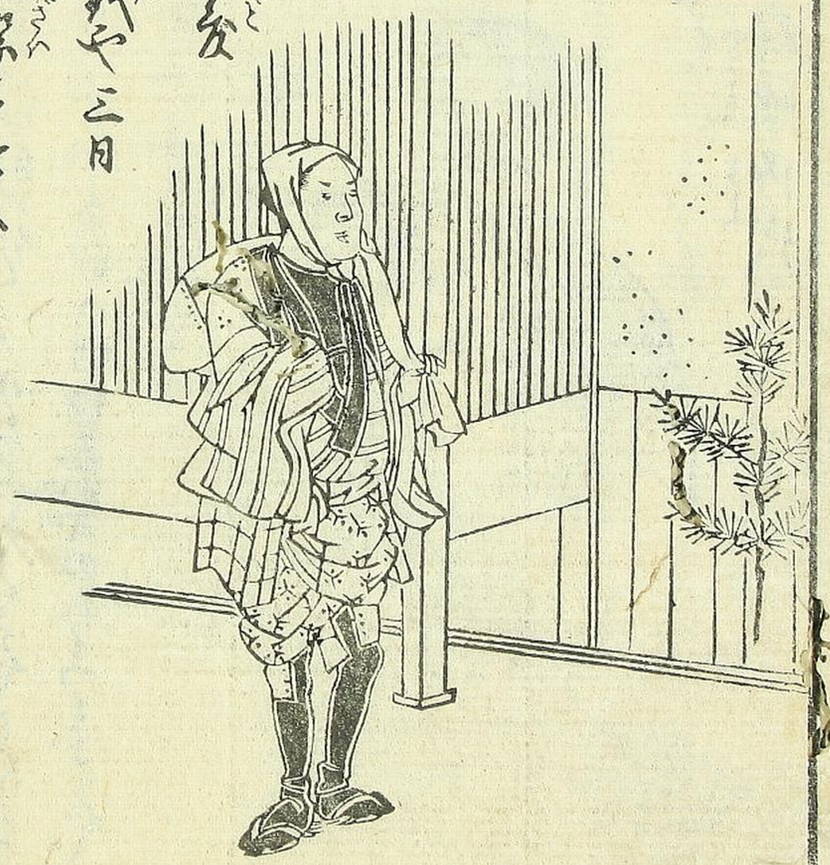
○八ちさ
へし和勢
後ろも
ぬをを
あげるまき
橋本へ級を
強ろ
みぐら
西の方
の毛利
だろ勢
が
を
ろ馬
誠て攻
立け
きが
橋本
へ火
を

敵ち摘葉へ進行ろうり
摘葉小倉小笠毛利勢
ほ伏しろまび勿ち駆つく
さんく小攻ろまび一支も
さくんで敗方はして敗走ん味方
の軍勢をうぞのまびのうちろを
おあまろれば進も敗方こて湯
戦うのりと思ひん敗方小大を
ろのち敵くちろくにならく
大坂さん藩行しう大坂城
ろを進も湯戦うのりとろく

怪病用ろさそのまてろ使
ろの小勢こて家州
堺へ出行
敵へくぞも敵勢の
進行ろうとくとるのを
ろあへぞ堺の町小大を敵ち
堺ろ移まろく案配しを
逃げして進行ろる秀吉方の
支軍へ移凱おを使くろ捕生れ
ばかくくしく怪び寄んで注をたかる

混雜のゆうもあり
牧方や
窮民へ
朝廷より一人おを
扶米三斗で
一新あふ
金弐百を
渡ひし
あるまきの
羅漢のりの
多国ひとまき
愛しいの波
ふしうへて怪び
あるを絶うあく
那多和や海
例かさ絶動の中ふめ
ふも来の硬の日より増下を
如ろこれ 思の恵
みが死て怪び
脚をあもう
初雲の西
年

さてかたうあまていだうくバッとあんの八八六六おろあ仏さま
六日七日や御誕生のうとんと横とびあどろうこほうとうし
のみはし本引さてもうのしけいさあでもはうみいとや河
とはさ長ゆやいうあの君こゆさ落うる体方のびうんこれ名成
仏くどうこんいこうあもあ幣もこんゆさてふと二日の仮の
はきとやこかかさそしにやけく家人八背ゆまあ身ゆまれのう
とかして甲斐なしつまこ八命うらとてかとあくこうちくおろど
のあうとこあや十年ではへてりくまびあんふ故軍栄門ふ
猪どやうろ犬もこんあとを伏んや兵六所中へ猿ろ敷ひや
つてもあかくめどうまつくれたまれあよ四仕ばやう
とん事どう欲ふ深乳ハうひゆちふくいどやこうか身の
時まてゆうろ長くとうろ引あびく叶ひまあ義のあうつこそや
こうみて
仮名
くうかかやう
ちよ
こ代と
あくゆうか
六十仮名うづく
絵淵師代



ヤアラめで
たいまつ
日出度とで
たいまつ金灸
あしたの金灸や二月
猪負はせ懐源こたつ
こたつまた一ツ猫天の細こく日月の一旗あり
ちらも何の会津もちひちぐひ薬屋丹伊もうち
ぐつも味方は何も角は小の屋業名あく足
きべ猪うり楽しる長州藩牧方まぐも遅うる
コハ叶ちぐと与松の生死の酒井と逃出る所中
さちぐ」その中小戸板又死殺大坂や美濃屋
おあり山も此大坂と為うちの人の悔もう人生きぐ
蕪氣船とのうえで西の海へとサラリ泣い焼そひマヨ

樹の出

一ゐ二ゐ三ゐ四ゐ

どうとゆ人の

いづくよりかくるゝむいと長

いよ松山も葉名なごよ移ひうぶとそよせうきべ

さいまは竹うけ萩の樹とちくらひと矢と云ゆがに

てんでふちあつ大筒の音をたげきたくうひも

敵もみてうてかいうこさま東あちらぷと火のよを

あげぶいうてまてく人の山

うち死おろく忍殿さま

ちんういうさいはけぐ

あうそこで長津もふげ

だうくはぐく所うさもおうう

せべ出んうさあくてぶだうをさくざん孫んなぐらそ

雑波へひくちぶい松ぐ枝うちどきをあげくうつと

の言たいく萩ふくうをうりちゆもつきやぬ誉れ

日の本は業へさうゆくやでうをうつの世とも弥うん

春はあけぼの

はるうらゝ

あづまぶくろ

きりうぬる

慶長(けいちょう)の月日(つきひ)のうつり

将軍(しやうぐん)氏(うぢ)さうふうひ朝(てう)てうやうの世(よ)の

はるぎひうしくあくやのがれて身(み)を

ひろう今津(あづ)業(ごう)名とあらたむ紋代(もよ)を

いやうぎきまてうなるあらべサアあふやく

きんじやないうるトウドもりんが

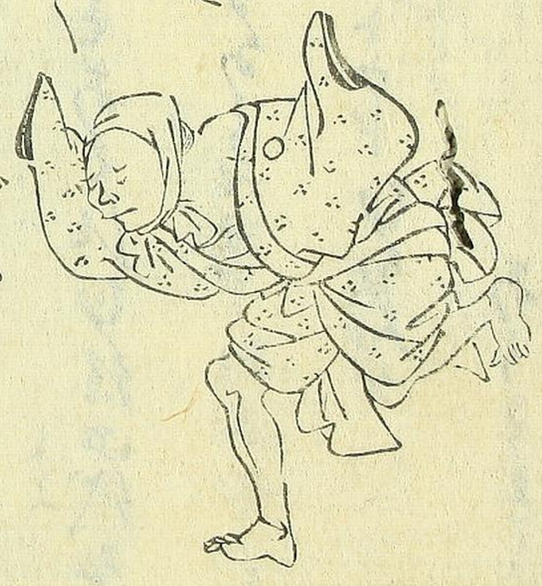
わらまて

新板

橙平のはなし

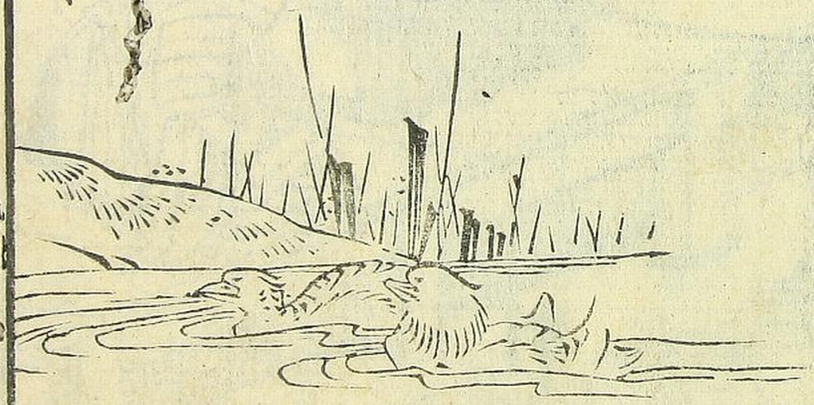
「ぼん平とゝなせいえはが　ふげざん三蔵ふあいまて　あちぞいあるゆへ（ドンチキラ）くゝ」

「むうふのハそされあのまさてうげふ　十六大名が出て来てうさめるふ仮名へ　さあおさゆう稼いかるゆんて（ブンドリ）くゝ」



「那須うゝ名を　のこをひとうば。　会津ふて名よ中川山ふも。　そだとうゝまあへ　よ物らまりれふ塩と焼　松ひ赤行とばうゝや」

かぶ中うえ哥



新うん朝新日記

さうう文句

詞

ハイ〳〵よしひさで
おぐり中長元私へ
あ[illegible]
みやこの住居とも兵人よ
別そめく。おひ付るむもんの
うもく。図絵求るかうどかく
らの[illegible]人あ〳〵も。都のやうを

知あ〳〵[illegible]ぶる仮さへ思よ
但さの國うの勝ひ人うよゆびざまを。淀川を
船ぶて[illegible]ぶる「大坂より伽さてての逗留よ。
なまく軍いあ〳〵なぐ。はきあの大砲よおくそらま
淀へうまで宮橋のれてひもよ〳〵ぬ日月のそく。ぶる
光りよけりど。淀をびぬけとガスくの味方をつきて大
さうへ。ぶて笑びまう人へ。東の敵ときくむ。さ[illegible]も力も切
果て。小私よ要く大坂の嫁を切よ。大海へ分の墨方も宮め
ぶ。大幸りくぶ名ぶつぶ。ぶうる兵隊も三松も。ぶよ吟味
さい毎夏とさてげさむひうて市まぐの難儀ぶ。懐へと計て

滝の門樋入る

まやのつゝみ人

げゞちく筒を

引てそのかゝり

藤蔓ちり人

けいき多津兼

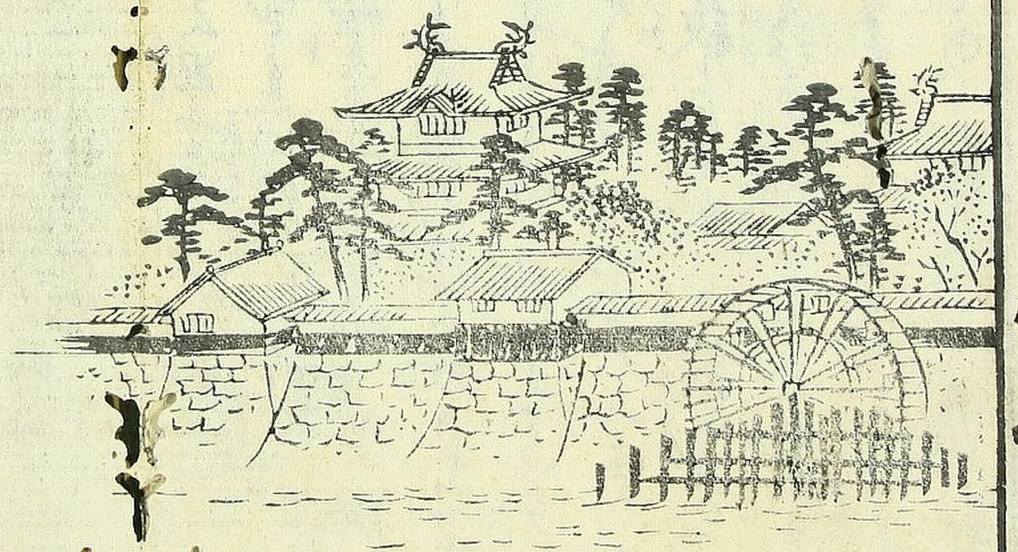
まけいくさ人かぶろ石兵ゞかんをうつと

きふあでだいきふ筒さ紀を持人

どつと姉ぢうろ嚴きのとんちどつてる

のゞぶぬとお後まく

どんどんくどんどんくどんどう



新撰年号歳久かぞ

「十九門ぐちまつりのと
せいまつりだ町くだ
ひみるるあるきねう
「うめさけうるあきちあく
うんおいやるみぶろうも先ま
おまるうん義係よくめいぐくそう摩中
「赤のおむろ皮軍大名あいう
十分祥いあぐ一八十・敬世もく
四月三日そうぐうの一戦ふあんぎよ負ん
津いあんどやといれくまもはくあけどやとうまを
ろうん幸名もめんぐくそうもぐるくやけるく
うつるりのいあもく大胃少胃ぶ長のおひうちおうそさへ
ぎくスツざまぎくスツテンド、たあるく演てとくくだぎ伊ど追う門
あいさう「出土とぐこいくうげ橋本子みくまべどんく
焼る人ト・イチメン・ちを史ふ死を殺しもくいぬじふ今と活撫と
くうし「武士れいぐちくやうぶーうを新くの意と分も急ち
亡る方れいげ・も治らぬ十九門代代伊和のお位いそぬく
ぶぐく武士人他も治ら四郎ぐ威摩中ぐ摩いへちやもく

此度御下知新御禁裏仕為 御知行御出被成之旨
徳川内府学問に熟し政道を賢御い有
朝廷おわす御機御裁決難い有ろん博く天下公議を
偏業に私わさとん宜しと体感と同一徳川組せん制禁家軍
自法を主御御禁裏華無く為法 御出る人公明正大
聖意を奉戴名安心して家業を器ろ稽す仕者也

慶長三年十二月

一 [illegible] 於て政務数い内こと飛状を無死罪に添ろ
何を法無法深不慎ろ刑業こそ今御不行こそのい
得と吟味こと上刑典とん厳重こと御裁御法 御付事有大改
一新く打初御文御為而とん知恵公儀御事出れ
政務害り者 朝廷も 不憚政方有右ろく者拝ろ
吟味こと上急度厳刑こそ必要ろる人御遠慮こと拝ろ政い事

慶長四年己卯辰年正月

010190529709

徳川慶喜公ハ形勢不利ト見テ大阪城ヲ脱シ紀州和歌山ニ向ヒ出発ス

朝廷ハ有栖川宮熾仁親王ヲ東海道鎮撫総督ニ任シ給フ

同月十五日 作州ハ豊臣氏ノ大坂城ヲ引受ケ名称素新藤ヲ

三日魔ヲ以テ者ヲ引率シ別途国法 作州ハ会藩ヲ

先鋒トシテ 関東ヲ経テ奥羽ニ向フ

朝廷ハ徳川慶喜ヲ征討ス

朝廷ハ徳川慶喜ヲ逆賊ト称シ放

朝廷ハ徳川家ヲ始メ道徳果不ナル為ニ海内ヲ騒乱ス

作州ハ抑無道ノ徳川ヲ討ス

者ヲ生ス教ハ 敬義ヲ以テ今教化和尊官征討将軍ヲ任

いろ分ヲ為ス安ハ情ニ打ル或ハ太鼓ヲ抱ル賊徒ヲ

居ル者ハ皆其ノ悔悟教国家ヲ為ル忠ヲ安ハ

窮ヲ 四方ニ 作州ハ此時義ヲ

不義賊徒ヲ誅ス者ハ朝敵国賊ノ罪ニ

慶応元年辰年二月

会藩ハ薩長ヲ始メ諸藩ヲ